

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子つつじヶ丘保育園
施設所在地	東京都調布市西つつじヶ丘4-29-1
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

1. 活動のテーマ

<テーマ>

子どもの探究活動・身体（四肢）を使ってよじ登る

<テーマの設定理由>

（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）

- ・子どもたちは、段があると登りたい
- ・山があるとはいのぼりたい。そんな子どもたちの「やりたい」を実現したい
- ・乳児期は、自分の身を守るためにも身体を手で支える運動を沢山経験したい

1歳児の保育室には固定されたロッカーや玩具棚が沢山あり、子どもたちは発達とともに動きたい、走りたい、登りたいといった欲求で溢れている。そんな活発化する欲求を満たす環境を作りたいと考えた。

2. 活動スケジュール

【登る環境を設定し、子どもたちの興味を探る】

5月～

・園内にある粗大運動玩具（巧技台やマット）を使用し、子どもたちの「のぼりたい」という欲求を満足させる遊び環境を設定し、子どもたちの現状や興味を探る。

【スタッフが勉強し、環境を修正する】

7月22日

・書籍「柳沢運動プログラム」を参考に、欲求を満たすため課題の整理と方向性を確認。
・発達段階に応じた「登る」を検討する。
・室内では粗大運動活動（ウレタンの階段、マルチパーツ）を取り入れ、子どもたちが重ねて高さを出し、上ることが可能な砂袋を用意。
・その様子からぎゅっと掴む手指や足の踏ん張りなどの動きへの欲求があることを子どもの様子からも理解する。特に足の踏ん張りへの欲求が強く、上ったところから飛び降りたり、ジャンプを楽しむ姿が多く見られた。

【園庭を整備し、登る力と踏ん張る力をつける環境用意する】

8月 園庭に築山と砂場が完成。

9月～ 園庭活動時に築山と砂場を利用。

砂場はしゃがんで遊び踏ん張る力、築山は登る活動に活用。

【室内の登る環境をブラッシュアップする】

12月16日 段ボール遊びを取り入れる等、感覚探求ができる環境を用意。

12月24日 築山での活動や室内での遊びの様子を考慮し、室内環境に太鼓橋を投入。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

室内：ウレタン階段・マット・マルチパーツを設置し、登る・飛ぶ活動ができる環境を整えた。
太鼓橋を購入した。

園庭：築山と砂場を整備し、四肢を使った運動ができる環境を整えた。
東京すくわくプログラムの補助金を利用し築山の工事を行った。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

【登る環境を設定し、子どもたちの興味を探る】

園内にある粗大運動玩具（巧技台やマット）を使用し、子どもたちの「のぼりたい」という欲求を満足させる遊び環境を設定し、子どもたちの現状や興味を探る。

【スタッフが勉強し、環境を修正する】

運動遊びの書籍「柳沢運動プログラム」を参考に課題の整理と方向性を確認。保育者の視点を統一する。

室内にウレタンの階段、砂袋、マルチパーツを取り入れ、登る遊びの観察する。

「のぼる」前段階として、固有覚であるぎゅっと掴む手指や足の踏ん張りなどの動きがある欲求があることを子どもの様子からも理解する。

【園庭を整備し、登る力と踏ん張る力をつける環境用意する】

探究活動ができる場所を園庭環境にも拡充。築山と砂場を園庭に作る。

【室内の登る環境をブラッシュアップする】

さらなる探究活動が出来るように室内に太鼓橋の玩具の設置や段ボール遊びを導入。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

・登れる場所や玩具を用意したが、棚の上に登る等の行動が続き、「危ないから降りようね。」という保育者の声掛けが続いていた。ウレタンの階段や砂袋等を常設したところ、不安定な足場に全身を使って探究活動を楽しんでいた。室内で走り回ったり、棚に登る活動を行っていた子どもたちが登ってジャンプを繰り返し楽しみ、「いくよ!」「できた!かっこいい?」などと運動欲求を満たすとともに自信を深めていった。

はじめは足裏で着地が出来なかった子どもも徐々に足裏で安定して着地できるようになったり、降りることを怖がっていた子どもも挑戦する姿が見られ、日々身体的発達が見られるようになった。

園庭に築山などが追加されると、それぞれが発達に応じて走り登ったり、手をついて登ったりする姿が見られるようになった。降りる際も駆け下りる姿や怖がって保育者に助けを求める姿が見られた。子どもたちも園庭での活動に徐々に慣れ、築山で後ろ向きで四つ這いになって降りる姿など、以前より挑戦しようとする姿が見られるようになった。また、裸足で遊ぶことにより、砂や芝生の感触や温度等を感じながら、バランス感覚を養っていった。

室内ではウレタンの階段や砂袋に徐々に慣れ、徐々に棚に登る姿が再び見られるようになった。

子どもが入ることができるほどの段ボールを用意すると、上だけでなく押し車のように遊んだり、重ねたり、中に入ったりなど様々な姿が見られた。

また、太鼓橋は子どもたちが一人で楽しむにはまだ少し難しいこともあり、感覚を集中させて取り組む姿が見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

取り組み前は棚やロッカーによじ登って座ったり、ロッカーにぶら下がる姿が見られた。「のぼりたい」という子どもと「危ない」と止める保育者と対立し、声を掛けたり、降りるように促す日々が続いていた。保育者も子どももストレスがたまる日々を過ごしていた。なんとかこの状況を解決するために、登る、をテーマにしてすくわくプログラムの活動に取り組んだ。

みんなで本を読み合っ、環境に見直すための勉強をすることで、子どもの行動や発達に応じた運動遊びへの理解が深まった。登る活動は危険が伴うため、導入に躊躇したが、室内外の環境を見直すことで、やり方がいろいろとあることを知り、子どもが登りたい欲求を満たすことで、静の活動（ままごと、制作など）も豊かにできるようになった。そうすることで、子どもたちが楽しいという感情を身体全体で伝えてくれるなど子どもの表情や表現に変化が生まれるようになった。

子どもが集中でき、身体を使ってよじ登ったり、身体を手で支える環境が用意できていないことに気付いた。1歳児だから粗大運動の活動の常設は難しいという考えだったが、活動を行う中で、大人が環境を整備すれば、子どもたちに様々な変化が生まれるということに改めて気が付いた。

探究活動や欲求を満たす玩具等を用意したことで、棚に登る姿が減った。また、発達に応じて、それぞれが「少し難しい」と感じる遊びにより集中する姿が見られた。築山で遊ぶことで手足を使って登ったり、座って滑り降りたり、それぞれに身体に力を入れて登る活動が充実し、気持ちが安定することで友達との関わりも深まっていった。

もともと体を動かすことが大好きな子どもたちが、次にやりたい活動をどんどん発見する等の成長が見られている。築山などで探究活動が深まり、身体（四肢）を使ってよじ登る、踏ん張る力がついたことで、子どもたちがやりたい遊びを発見するだけでなく、それを実現することが出来るようになっていった。また、その遊びを他児と共有し、周囲との関わりも深まっていったことも嬉しい気づきだった。